

住吉丹前

荻江 全詞章

荻江節

本名題「紅葉傘住吉丹前」（もみぢがさすみよしたんぜん）

作詞者・作曲者・初演年不詳

〔ナゲブシ〕 ちはやぶる、神をいさめの御祭り

〔外記オロシ〕 赤前垂に對の傘、みな一様に、そろうたそろうた紅の、色も変らぬ朝日影
裾打ち払ふ朝風の、靡き栄ふる今日の神事へ

傘をや、傘を差そならえいいい、春日山

これも神の誓ひとて、人が傘を差すならえいいい、我も傘を差そ、よげにも添ふよの

〔ヨトシ〕 げにまこと、小松の陰の下露に、よその袖までしつぽりと濡れて、浜辺の濡鷺か、沖に鷗が友呼びかはす

はんま千鳥がちりやちり、ちりやちり、ちりちり、ちつとも漕ぎ出せばのう、唐櫓の音がしと、とん、からころからころりともしづが手をいや、布引の滝の白糸うち晴れて、天つ岩戸の神歌を歌ふて、いざや清むべし

〔ヨドリ〕 浜の真砂の数々に、なにと波に身を焦がす

その益荒男が真澄鏡、波に成りたや磯打つ波に、女波男波の濡れに濡れたる中ぞゆかし
あら羨まし、如何なれば片山里に住吉の、踊りつ舞ふつ喜びつ

〔二ギン〕 住吉さまの岸の姫松めでたさよ

筆取りそめて筆取りそめて、恋といふ字を覚えさせたい、さりととはさんざさんざ

墨と硯はよい仲人、思ふたけをば知らせたいぞへ、さりととはさんざさんざ、筆に言はする恋の道

〔セイカカリ〕 それ、雲見る時は衣服を思ひ、花眺むれば容を慕ふ

桃李芙蓉の紅に、楊柳の細腰と、その唐歌の色ことに、うとき浮世を大和なる

三十一文字に和らぎて、恋と情のその中々に、口舌の種を蒔き

ばをりくわんくわつすいて当世に、日本唐土つかみ差し

だいせう差すが唐傘の、天が下取る稀人とは言はねど、それと三重の帯

美し色にうつろふ紅葉、梢照ります村時雨、一降りゆり掛け、降れ降れ降れ

濡れにかしこき恋奴、傘に守りを掛けまくも、かたじけなやかたじけな

隠れござらぬ花の顔見世、江戸市村の御蟲眞を便りに受けて、すいせんのしやんしやんと

姿は男らしいや男らしき、つとしてじつとして、じつと締めたる風俗や

〔三下り 吉次カリ〕 その面影のしばしまも、忘れかねたる初恋に

〔中ギン〕 恥かしいこと言はるるものか、仮名のほの字も穂に表れて

〔ユリカカリ〕 本ひとりに思ひこがらしの、風に便りの音づれも、鳴いて、さ渡る浦千鳥

歌幾夜寝覚めぬ独寝も、まこと恋路の新枕

〔ツツミ歌〕 およそ心なきをなごでも、履ける足駄の端くれに

〔ギン〕 作れる笛のその音には、必ずしかも夜の露

〔中ギン〕 葉末頼りに結ぶ心の、恋すてふ

〔詞〕 さつても見事なお女郎さま。雲の鬢つら初霜に、くわつと笑ひし廿日草

〔ウタヒ地ヒヤウシ〕 それ、京九重の美しき美しき、御室の御所の八重一重、語るも見事音羽山

ゑゝ何じやいな、こちや花よりも、お江戸ゆかりの濃紫、染まる色かと寄りそへば

ちよとおじやまに、ちよとおじやまに、なりふりも

〔藤藏せりふ〕 どうともかうとも

〔歌〕 言ふにナ言はれぬ色香もありてなん

お供にとつつき負うて、ばばさ玄関前

〔羽左衛門〕 こいよない、なんなん、情の恋の品、雨にも雪にも通はんせ

恋は曲者、げに恋は曲者、今の世までも世の中の、風はよきて吹け、いま風に艦を押し立てて

漕げやふなおき、唐櫓の音がやつとんと、さつと立つ波浜千鳥、揺られてもまれて

ぱつと立ちそろ、びびくりびびくり、しかんかいな、そこで揃へて、さあ振れさ

殿さまのお召し物何色に染めうぞ、媚茶煤竹半ないろいろ

茶巾袴、茶くしてきりきりともこぎりめに、てんとてんと、あつたものではないよき、いさぎよや

〔ヲドリ〕 あれ見さいな、結ぶの神の仲立ち、ほんにお精な縁結び

出雲八重垣妻定め、あるは嫌なり思ふはならず、それじやそれじや、その一夜

恋のはじめは恥かしや、面白の色音たえる神楽月

花の丹前顔見世狂言、あさからとうから、えいとうえいとう

黄金満ち来る宝の市村、千秋万歳と常世の橘

櫓太鼓の音は久しき